

大阪府家藏瓦圖錄

159
164

159-164
1200800107844

Kodak Gray Scale

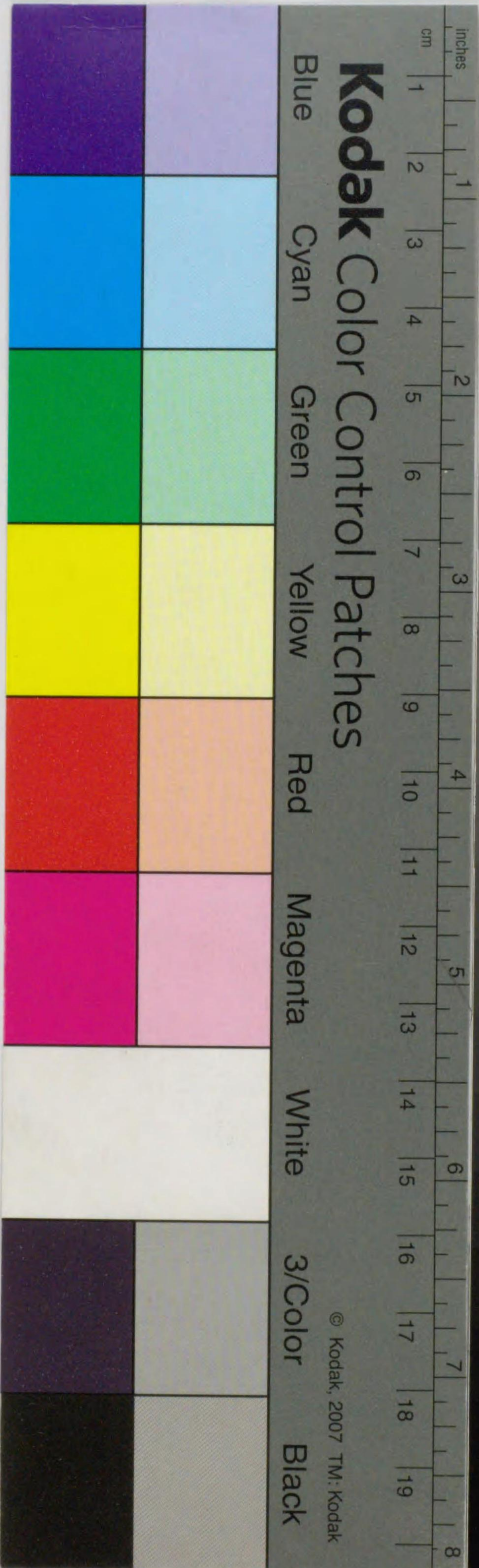


© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

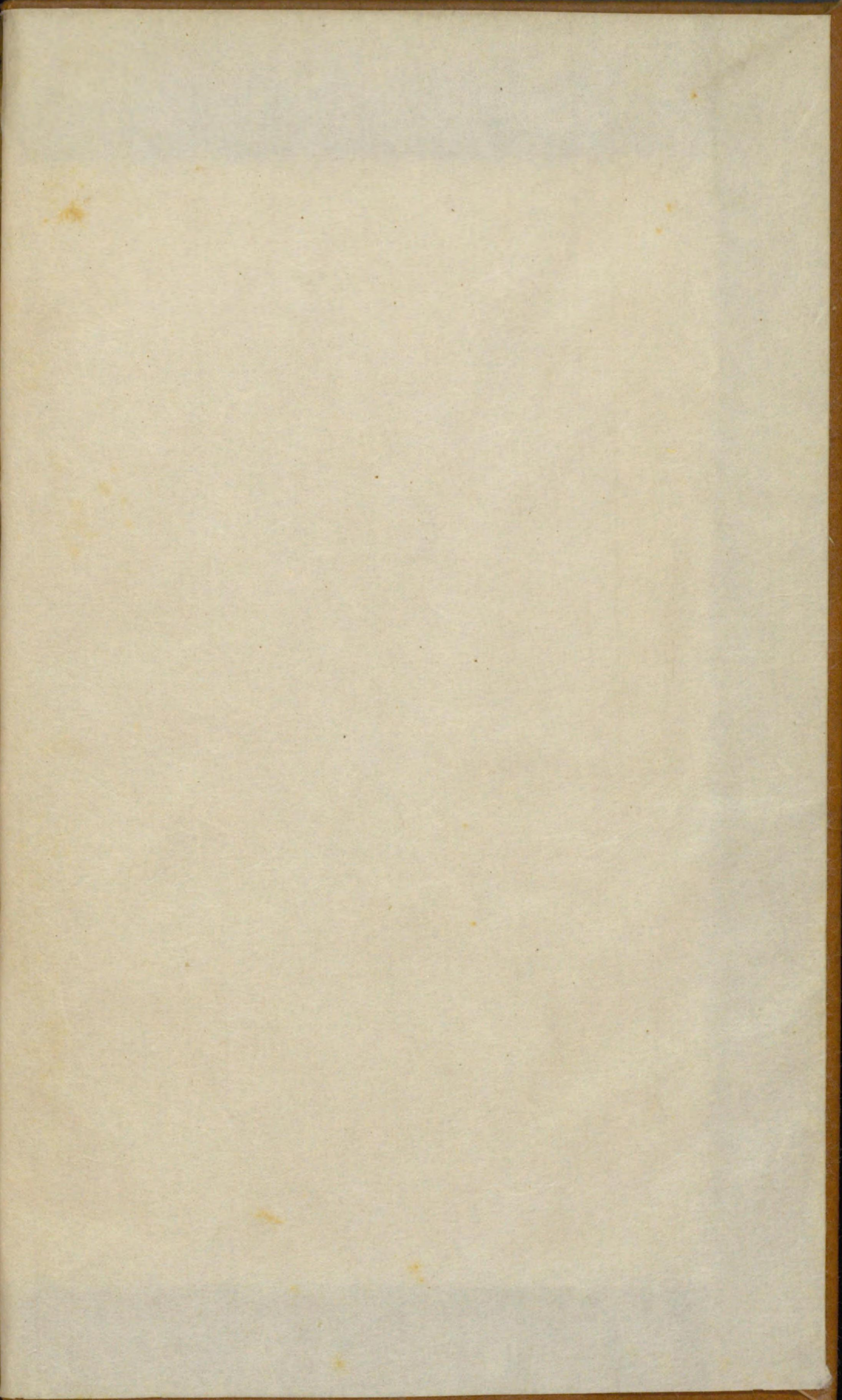
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



159
164

大阪府宗藏瓦圖錄





大脇正一あむ

大阪府家藏瓦圖錄

大正
8. 10. 15
内交

大正八年初夏六月稿

はしがき

私の蒐集した大阪府下の今迄の瓦は五十餘種で、府下の出土する瓦の一少部分に過ぎないのである、そして完全なのは少く、殆ど破片ばかりで、珍らしいものもないのである。然し紋様は時代の移推を知り得る事と思ふ。こゝに載せてある瓦は僅か五十種である、しかし出土地は正確なもののみである、尙ほ瓦の紋様の精巧不精巧はその地方の經濟的關係及び思想による事と思ふ。かくして文様に地方的色彩が出来たのではなからうかと思ふ。又瓦の文様についてこれは何時代であるとの確に分ける事は六ヶ敷い事と思ふ。それで私は私の卑見のまゝ年代をかく事にしたが沿革を知らぬ寺が多く、且つ杜撰で從て誤つてゐるであらう、しかし家事の寸閑に編むのだと思つて許容を願つておいて、年代等は自由に考察して頂きたい。瓦は昔から瓦礫といつて無用のものゝ例にされてゐるが瓦も礫も決して無用のものではない、石鏃の一少破片は幽遠な石器時代を語り、瓦は寺院や廢址の沿革を知る。一少破片も史跡の片影であるから保存を必要だと思ふ。僅か五十部を刷つて心相の親族と知友に頒つ事にした。

大正八年初夏六月稿

浪華津船塢

編者識す

凡例

- 一、瓦は總て約二分の一の大きさに寫して玻璃版にしたのであるが、まゝ違つてゐるので諒察を願ひたいのである。
- 一、寫眞の配列は國別にしたのである。
- 一、表紙の瓦は、表のは善正寺山廢址の瓦で、裏のは中河内郡太子堂勝軍寺のである。此瓦を見出したので私の土塔小圖集の土塔の時代分けに年代の相違を生ずるから道明寺の瓦の所で訂正して置く事にしたのである。

圖版目錄

河内之部

自第一圖至第六圖

國府廢址 道明尼寺 善正寺山廢址 東條廢址
片山廢址 高井田廢址 千福廢寺 九頭神廢址

和泉之部

自第七圖至第九圖

禪寂寺 明王院 家原寺 土師文字瓦
久米田寺

攝津之部

自第十圖至第十三圖

四天王寺 國分尼寺 莊嚴淨土寺 廢金寺



第一圖略解

河内の部

南河内郡道明寺

國府廢址

南河内郡國分

片山廢址

同所

道明尼寺

同所

高井田廢址

同郡古市

善正寺山廢址

中河内郡穴太

廢千福寺

同郡國分

東條廢址

北河内郡九頭神

九頭神廢址

和泉の部

泉北郡郷莊村戒下

禪寂寺

泉北郡土師

文字瓦

同郡北池田村中村

明王院

泉南郡八木村

久米田寺

同郡八田莊

家原寺

攝津の部

大阪市南區天王寺

四天王寺

東成郡墨ノ江村住吉

莊嚴淨土寺

同所生野國分町

國分尼寺

豐能郡新免

廢金寺千坊



期前代時安平 四
府 國



代時鳥飛 一
府國內河南



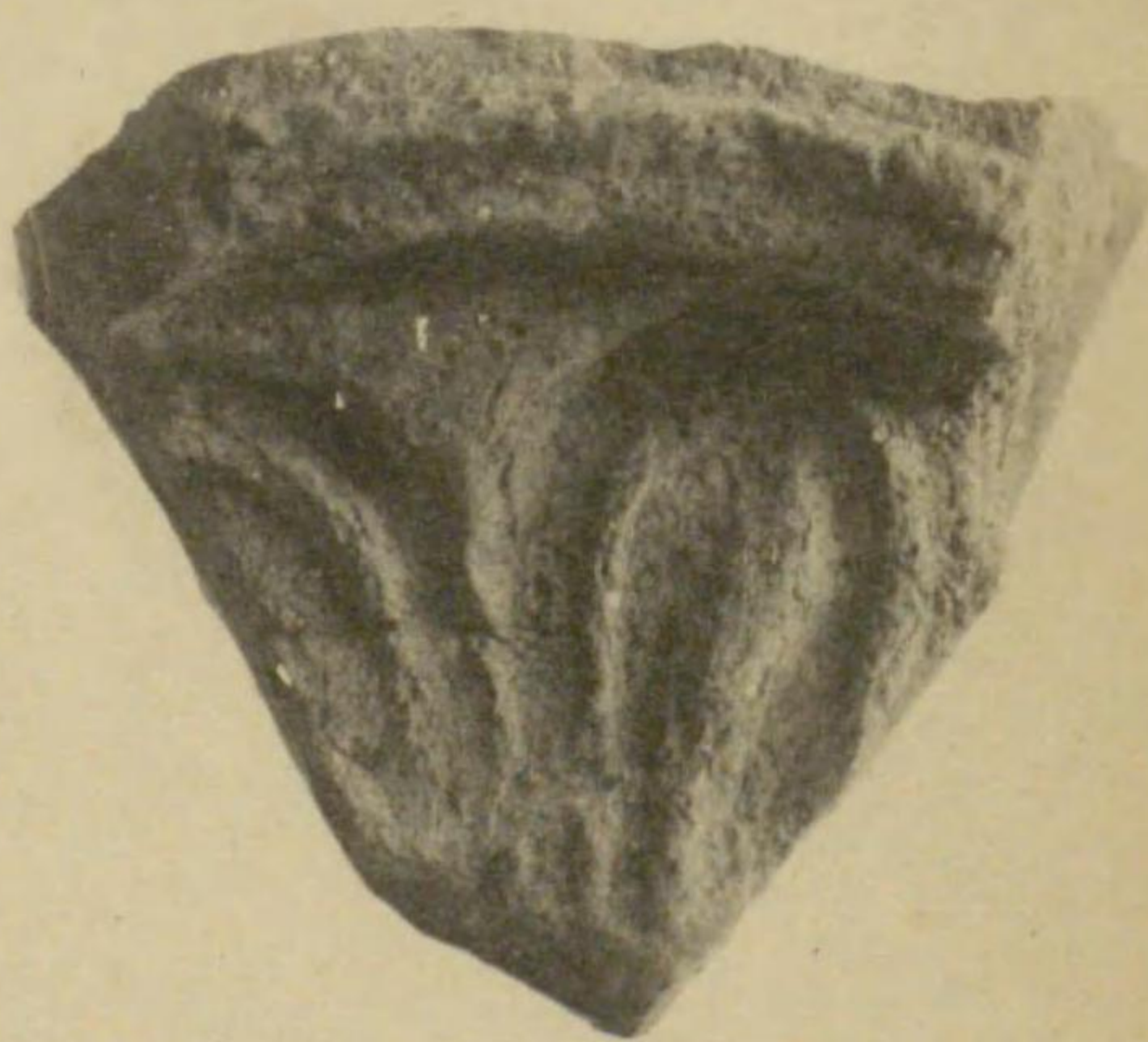
代時倉鎌 五
上 同



期前代時長奈 二
上 同



代時上同 六
上 同

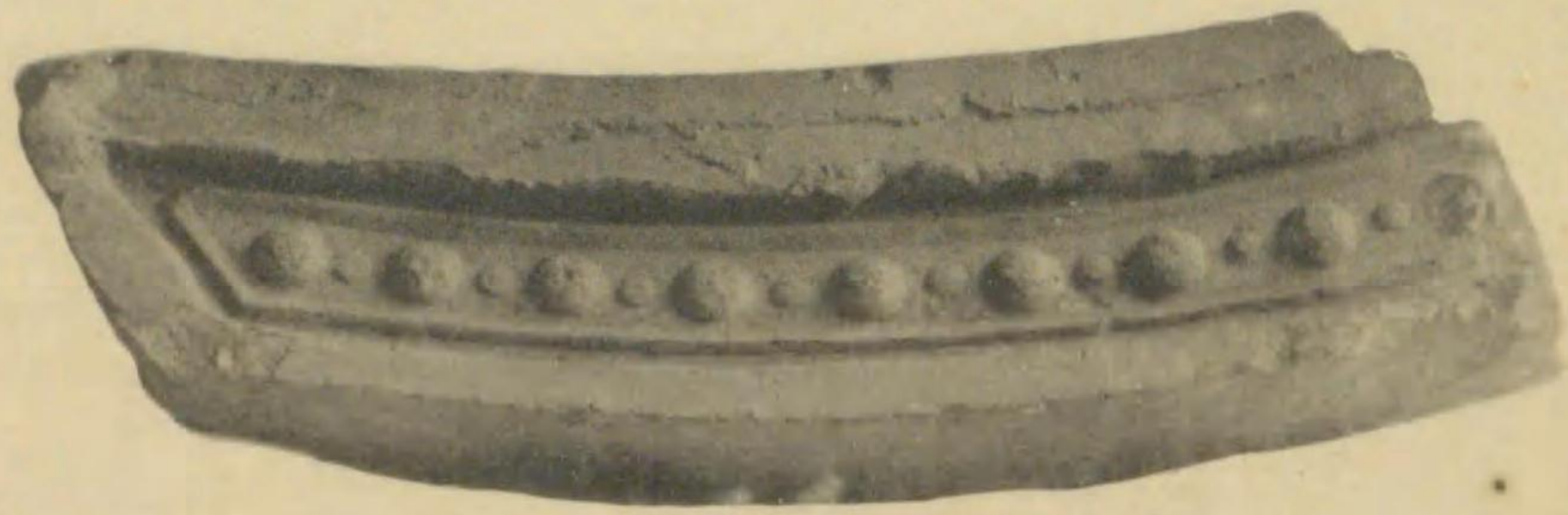


期前代時安平 三
上 同

- 一、大和地方には珍らしくないが、大阪府下には珍らしい、府下では私は未だこゝ以外では見ない。周縁は狭く蓮華紋はゆつとりとしてゐる。
- 二、意匠もよく全体に於て調和がよくとれてゐる、府下では九頭神でも出るがそれよりもよくできてゐる。
- 三、周縁の上に一つ圓紋がある、飛鳥時代の様式には輪廓上に重圓紋のあるのはある。この蓮花紋様は地方によくある、奈良時代後期に入れるよりは一期下の方がいゝと思ふ。製作土質上も平安時代の様式である。
- 四、は三と同一手法であるが周縁の上にこれは唐草がある、力強い線である、この唐草から考へても平安時代だと思ふ。周縁上の唐草は面白いと思ふ。
- 五、これは蓮華紋から見ても總ての点から鎌倉時代と思ふ。何かの臺に使用されたものか香爐様のものであると思はれる。
- 六、は五と同時代で初期のものと思ふ力強い唐草である。

第二圖略解





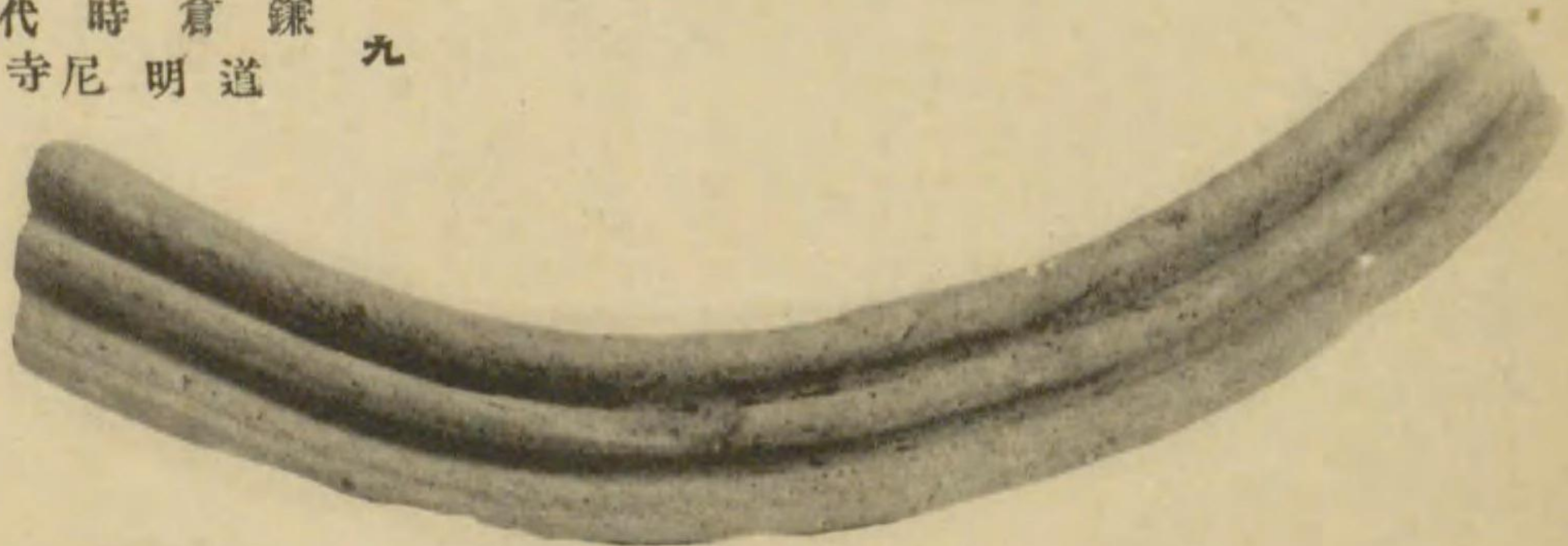
鎌倉時代 國府



鎌倉時代 道明寺



鎌倉時代 國府



奈良時代前期 善正寺



同上 東條

七、これは鎌倉時代によくある珠紋並列の瓦であるが、大きな珠紋の間に小さな珠紋が入れてある、一寸珍らしう思ふが、家根に上げてから少さなのは見ないであろう。

八の瓦は普通の珠紋瓦。

九、これはこの時代によくある梵字瓦である、この瓦は缺けてよく分らないが同寺所蔵のものを見ればよく分る。子房内の梵字は「キリク」で觀音の種子である。この「キリク」はこの時代に於て用ゐた、金剛界の諸尊に「ウン」を用ゐる様に。又十一面觀世音に「キア」、如意輪觀音に「キリク」、聖觀音に「サ」と云ふ様にしたのは室町時代からのやうに思ふ。この道明尼寺の本尊は十一面觀世音であるが觀音は蓮華部に屬するが故に「キリク」を使つたのである。伊勢出土の經瓦に「ウン」字を多數にかいたのがあつた、これは過去現在未來の三千佛をかいたのである。蓮華部の諸尊は「キリク」を以てあらはす。

表紙の裏の瓦は凡例に於てある通り勝軍寺の、散蓮華紋の中に五佛の種子があつて「パン、ウン、キリク、バク」と残つて「ダラク」は缺けてない、そしてこの瓦は私の見る所では鎌倉時代前期のものと思ふ。相するに此時代には五佛の種子の内「アク」を「バク」とかいたのである。私の土塔小圖集を出版してあつて入手した土塔の文字は明に「バク」をつかつてこの時代のである。それで私の土塔小圖集の時代分に相違を生ずるからこゝに訂正する、されば土塔はこの勝軍寺瓦の頃から製作せられし事が想像できる、又藤原中期の古鏡と併出した土塔も該古鏡が期を後れて副埋せられた事も考察できるのである。

又土塔に於て天沼氏から書簡を贈られたので、左に録して参考に資し感謝の意を表したいと思ふ。

「一」あゝいふ形の塔は私は密教以前にはないと思ひます。五重さか三重さかは以前からありましたが、(土塔形)は密教と同時に輸入されてから出來たもので、弘法大師が高野山に建立したのが初めてせう、これに下層の屋根をつつものと多寶塔になります。單層の寶塔が元々土塔の大部分は小さくもあり方々古式によつてあゝいふ風に作つたものと考へます、序ですが寶篋印土塔が藤原時代の鏡と伴出したから、單に天れ丈の理由で藤原時代は如何でせうか、立派な藤原鏡を鏡架に入れて建仁年間に佛像の体内に納めた實例もありますからです。建築沿革史の上から左様考へるのです。(天沼氏手翰より) 天沼氏の卓説と私も同じ感じである。

「是より河内國土師寺へ參らばやと思ひ候」捨ては、久しかりつる世中を。またおもひたつ旅衣。昨日の山を後に見て猶行方は白雲の。海もみわたる西のそら。夕日がくれの霧間より。流れもこれや河内なる。土師の里にもつきにけり。——神佛一如なる寺の名。みちあきらかに曇らぬ神の宮寺ぞたつき(謡曲道明寺) 和泉は行基の誕生地で河内はそれに近い故であるかもしれないが、和泉河内には宮寺が多い。道明尼寺は土師寺とも云ふておいたが、私の考へはこの様式は飛鳥時代からあつたのではないかと思ふ。即ち周縁の上に圓紋をもつ蓮華紋の飛鳥時代の様式の疏瓦には多くこの重孤紋と共に出るのである、その例は善正寺山、奥山久米寺、廢金寺、等がある。周縁上に圓紋をもつ蓮華紋の疏瓦とこの重孤紋の花瓦とはよく適ふのである。これは三分の一大(中氏寄贈)

〇一、のは大和地方にはよくある瓦である、線が細くて美しい。これはかけてよく分らない。

第三圖略解

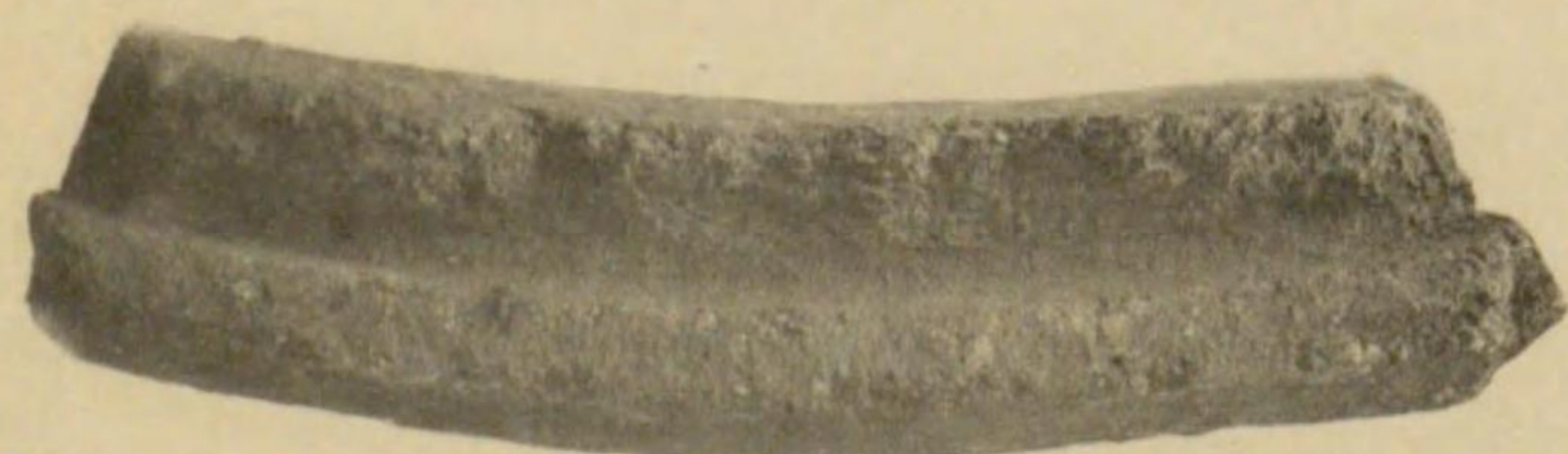




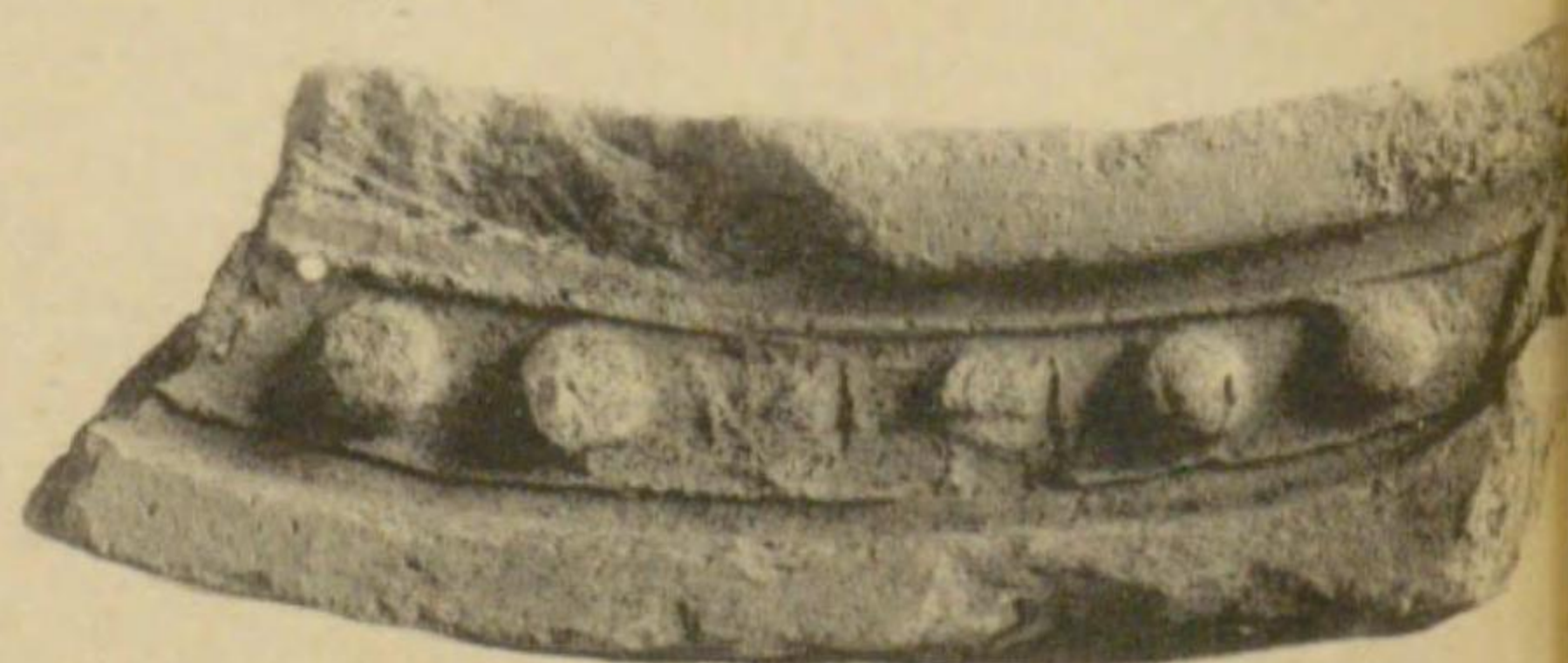
奈良時代後期
東條



同上
山片



奈良時代前期
高井田



鎌倉時代
山片

- 一二は中央が菊花の開いたやうになつてゐる、それから唐草がのびてゐる、奈良時代後期の瓦である。
- 一三は鬼瓦である。眉も眼も缺けて分らないが二の鬼と思ふのは上顎が鼻の下からない。
- 一四のは鎌倉時代普通珠紋並列の瓦。
- 一五これは三つの重弧紋であるが一つとれてこゝには二つになつてゐる。奈良時代前期である。

第四圖略解





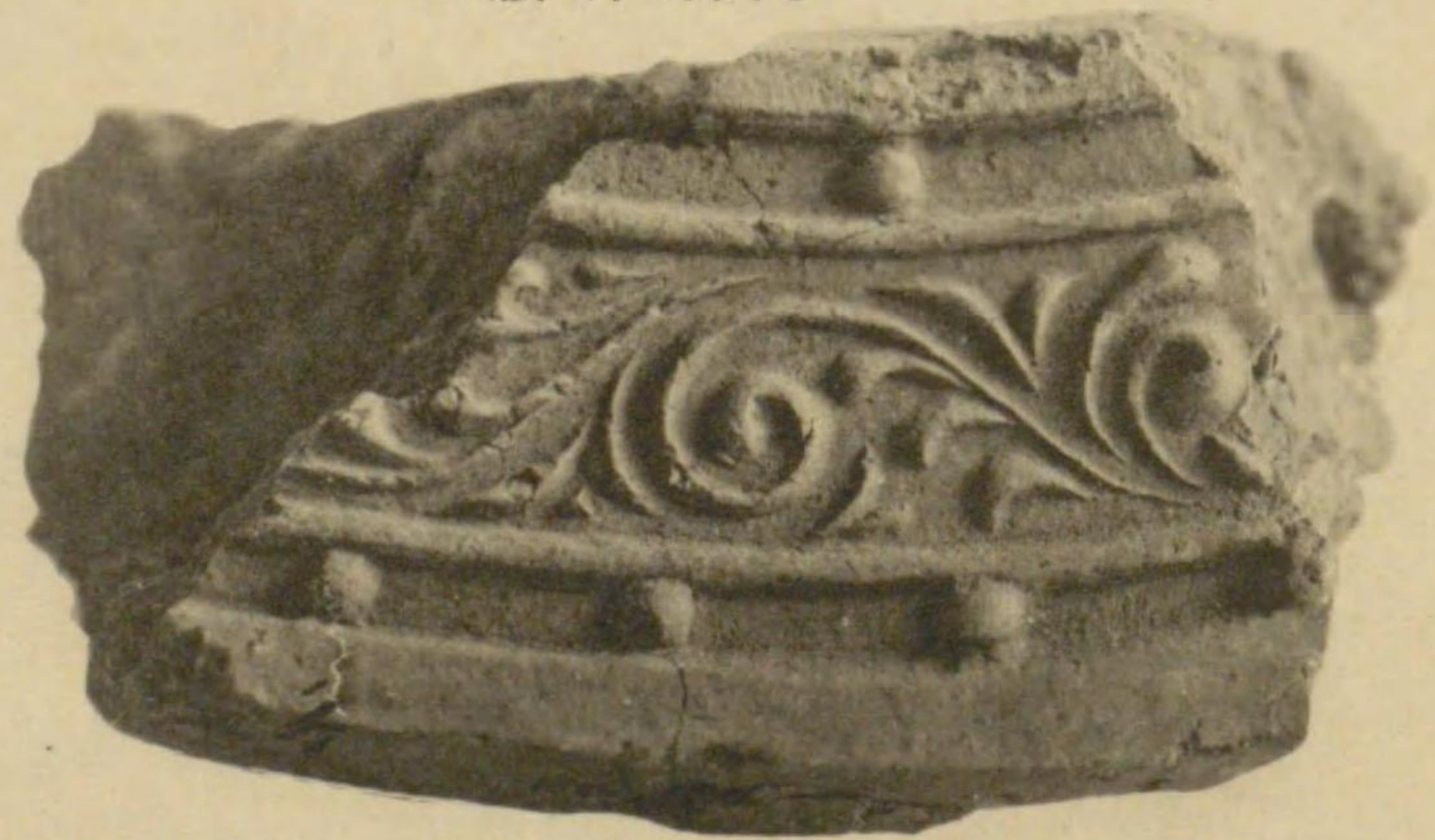
一六 鎌倉時代
千福廢寺



一七 室町時代
同上



一八 奈良時代前期
九頭神廢址



一九 同上
同上

〇一六、は蓮華紋とかわるに五輪塔をあらはしてゐる、塔の中に「ア」字がある、胎藏界大日如來の種子である珠紋帯が少し大きすぎる。密教では塔は正覺の極位であつて、諸佛菩薩の根本々地である大日如來の標示であつて、寶塔の建立は佛体を建立する事となると云ふのであるから、此時代の僧侶の考案で此瓦は出來たものだと思ふ、この時代ではいゝ意匠でいゝ考へであつたに違ひない。この時代には如何密教が盛であつたかが想像できる

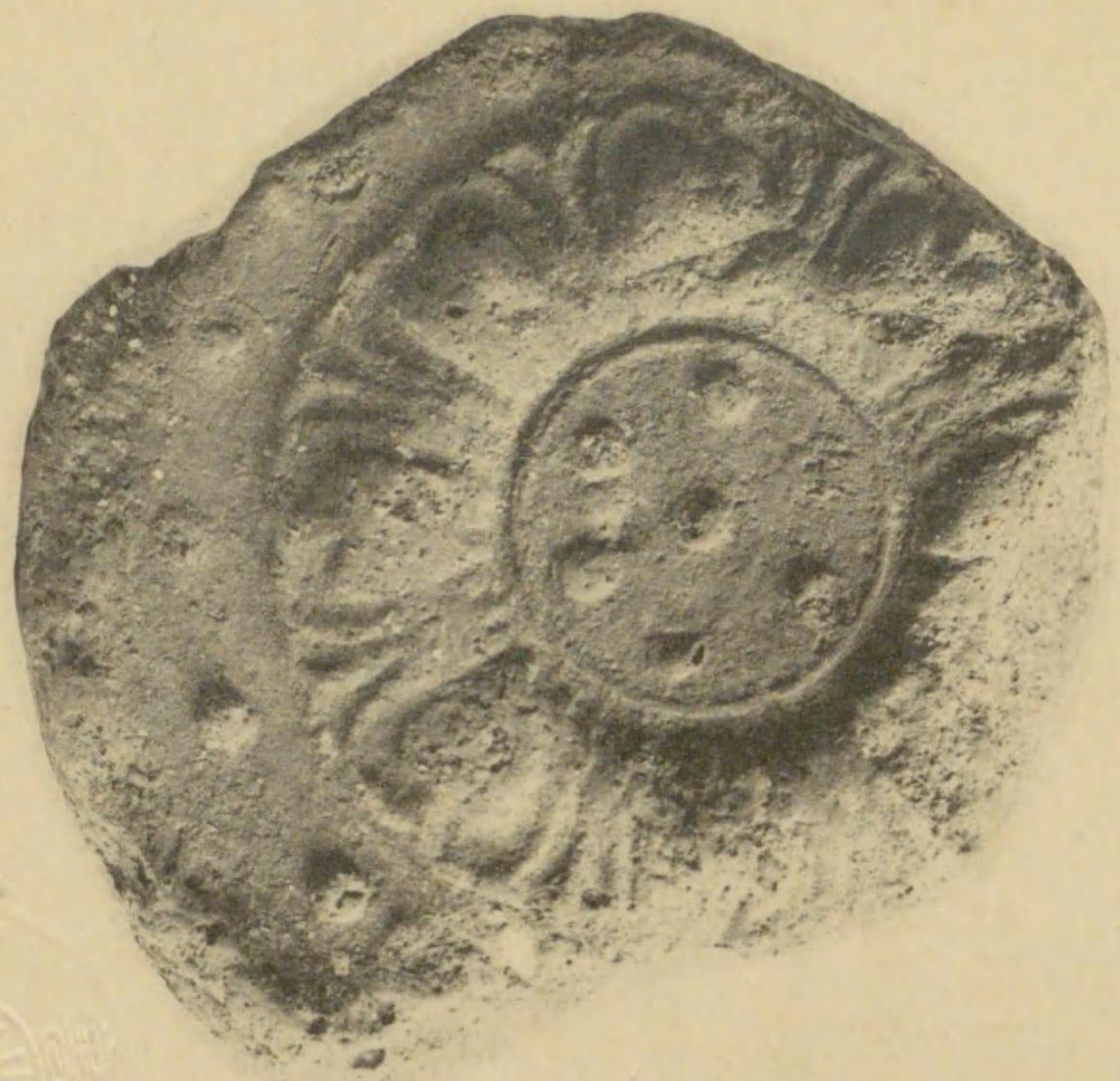
〇一七は小形の花瓦で珠紋並列も纖弱になつてゐる。この寺は今も廢寺だが以前は大きな寺であつたであらう

〇一八、これは二の國府の瓦と同様式で劍頭紋をもつてゐるが製作はこちらの方が少々落ちる。

〇一九、は唐草のよくできた線のはつきりとした瓦である。中央部は同所の後期のものの中央と同じであらう。

第五圖略解

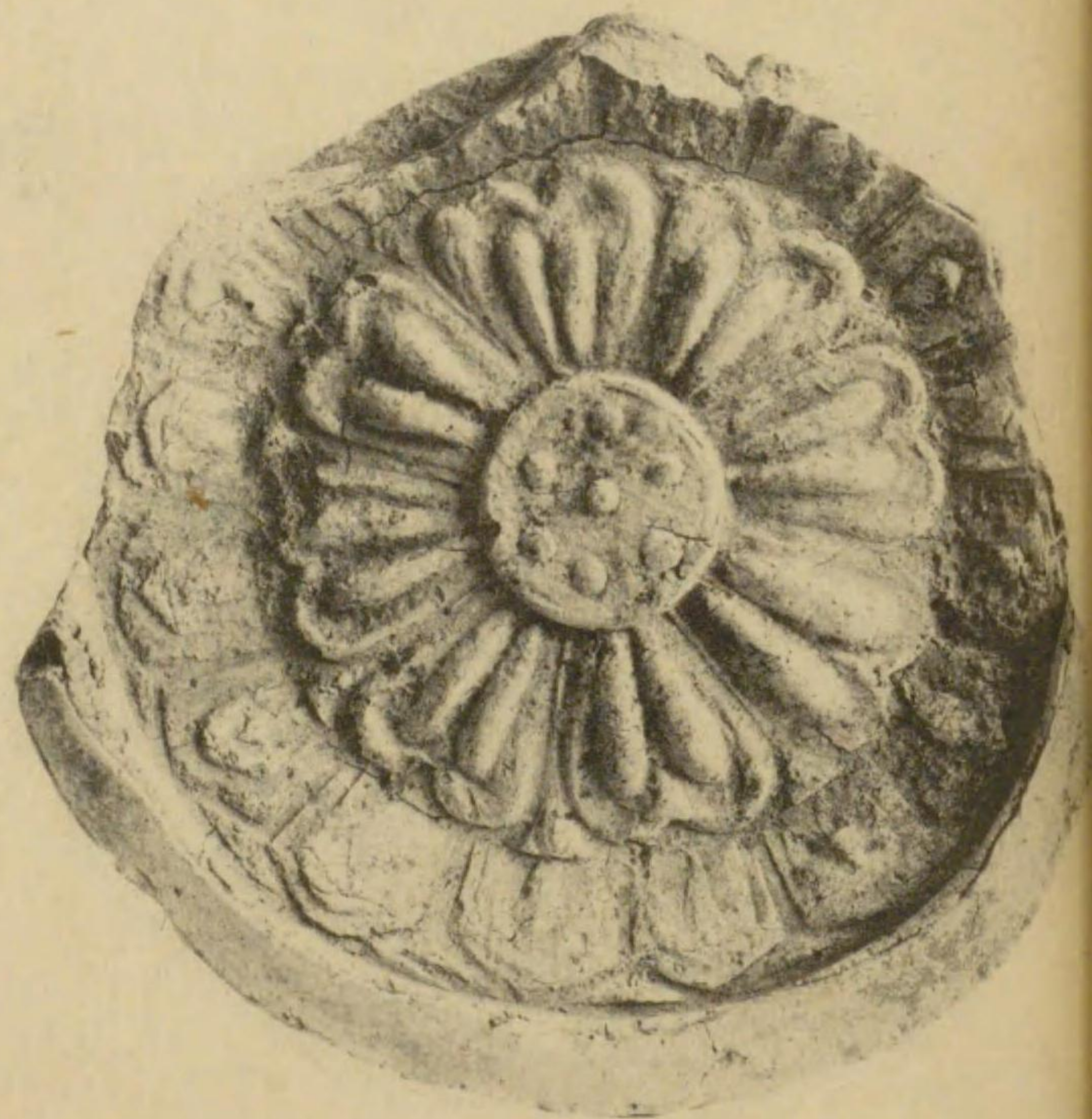




二期 奈良時代後期
九頭神



三期 同上
同上



三期 同上
同上

〇一〇、この蓮花紋は可なり感じのいゝものである。大分磨滅してゐる。周縁はうすい。

〇一一、子房は少さく、蓮華紋は奈良時代後期のもので唐招提寺出土の奈良時代後期の蓮華紋の疏瓦と對照してみるとよく分る。(田村氏寄贈)

〇一二、この瓦は一寸變つた蓮花紋で、手法は古くみへるが、製作土質が二一のと同じであるから同時代と見る。

第六圖略解





三三 奈良時代後期
九頭神



三四 平安時代前期
同上

〇二三 は完全のを見ると第四圖の一九の瓦の唐草の線の弱いのである。

〇二四 この様式の蓮華紋から菊花紋に脱化したのである。こゝよりはこれ以降の瓦は見當らない。平清盛に焼かれたと傳へられてゐる。

第七圖略解





二五 奈良時代前期
和泉禪寂寺



二六 鎌倉時代
同上



二七 鎌倉時代
同上

〇二五、は奈良時代前期の普通の様式である。(田村氏寄贈)

〇二六、は子房の中に四天王寺とかいてある、何うしてこの禪寂寺にでるか分らない。子房は高くでてゐる。子房の中に天王寺とかいた瓦は勝軍寺にもある勝軍寺のと同じの瓦が南河内磯長の西方院にもあつたので、天沼氏はその拓影を摺られて居られる。やはり鎌倉時代のものである。

〇二七、は蓮の巻葉の唐草である、面白い様式だと思ふ。こゝは雄健な飛鳥時代の様式の瓦から鎌倉時代までの瓦が出でる。又薬師如來の立像の埴がでる、府下ではこゝ以外埴のである所は未だ知らない。随分大きな寺であつたであらう。

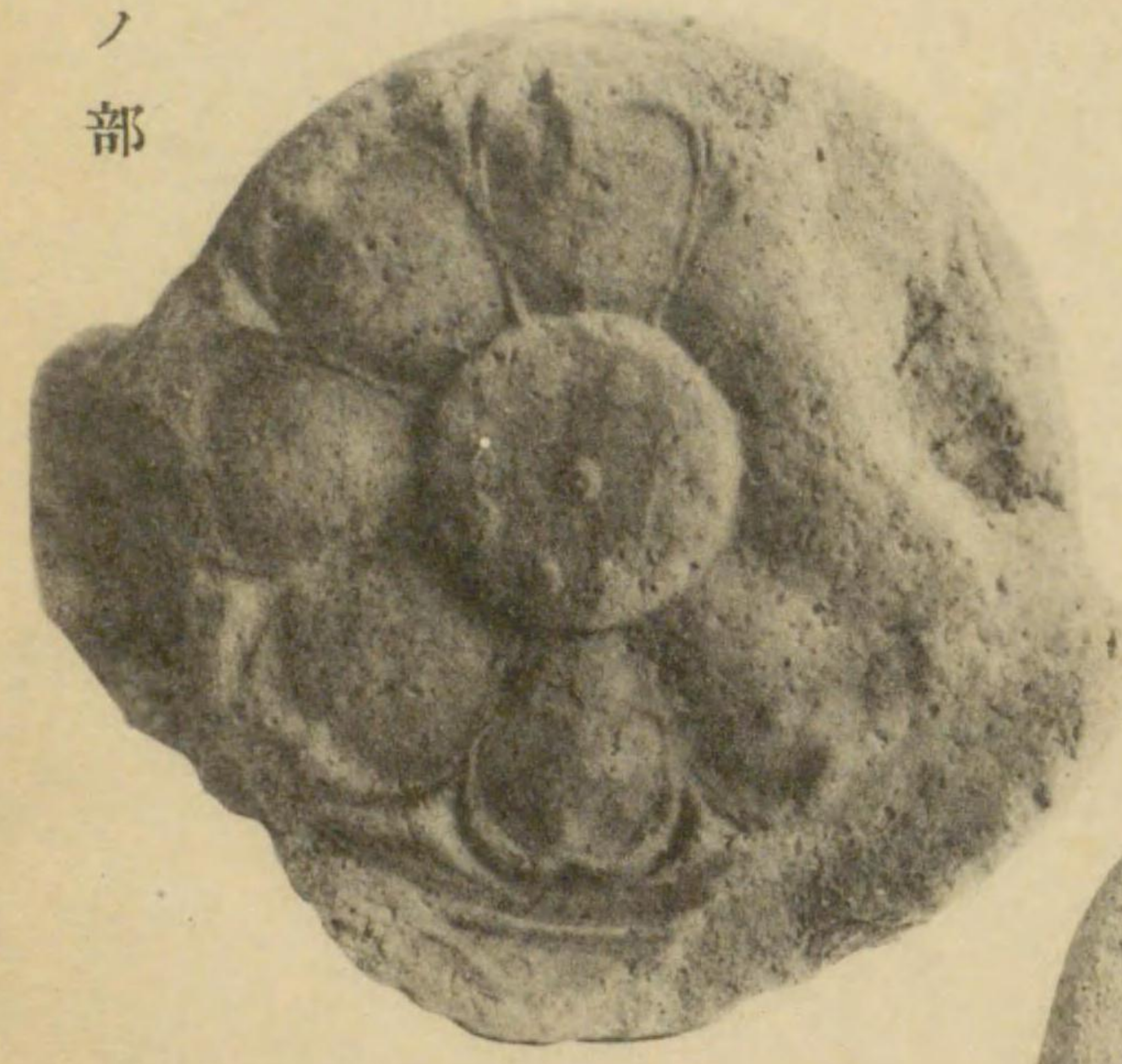
第八圖略解



第八圖略解



飛鳥時代
和泉明王院



奈良時代前期
同上



平安時代後期
同上



鎌倉時代
同上

〇二八、の瓦は大きな方ではない、單辨の感じのいゝ瓦である、飛鳥時代の様式である。

〇二九、この蓮華紋は繊麗で、瓦は大きくないが全体にいゝ形だ、斜の周縁に唐草がある。

〇三〇、この意匠は、何だかものたりない感じのする瓦で目立たない。

〇三一、蓮華紋は面白くできてゐる、六辨であろう、こゝは飛鳥時代の様式より鎌倉時代まで。

第九圖略解

〇三二、巴紋である、何となしに巴紋としての感じのい、瓦である。この家原寺は行基の誕生地であつて、行基の開基と云ふ、文殊、釋迦、普賢をまつる、家原文珠と云ふ。巴紋起原考

〇三三、梵文の經、始書レ之ヲ根本不可得、字ノ省也是レ鎮護火災義也又ハ行雲姿流巴ノ形ナル故ニ名ニ雲出之點此一字ニ三諦三寶三部三身自具足之ヲ能ク括ニ納ス於諸法ニ故ニ爲ニ根本ノ字也云々 と云ふ事が悉曇摩多體文と云ふ本にある。巴紋の起原は梵字を意匠し、又鎮護火災の義を意味したのではないかと思ふ。

〇三四、この瓦は信賢とかいてある。これは同所出土の瓦の中に百濟乃刀自古の銘のあるのがある。百濟と云ふ姓は貞觀七年九月十五日の銘のある古田券に志羅岐酒刀自女とか郷長百濟民麻呂と云ふ様なものがある、又全体の製作土質の上から見て平安時代前期であると思ふ。
(田村氏寄贈)

〇三五、これは唐草が織弱である。その割に瓦の輪廓があつて面白くない

當池院者一國令珠萬民依怙也。堅牢地神現黃牛曳塊。日月星辰示白人而周堤。所以大聖老人運鷲峯海會之土築之。善哉童子荷清涼山堀之壤加之。況國中神祇乎。何況州內黎元乎。一天聖主降勅語而遂行幸萬乘文武捧官府臨命池。內大臣某殊致功光明皇后勝加力遂以去神龜二年乙丑二月五日始掘寶池。以天平十年戊寅孟秋成功滿畢。(行基自記縁起)これで見ると此寺は古くからあつた様である。行基の開基で神龜二年起工天平十年七月成功、後ち荒廢したが今の堂宇は近年の再建である。後宇多天皇の祈願所となり弘安五年再興し。又永祿年中兵燹にかゝつてその後再興したと云ふのである。



三二 鎌倉時代 和泉家原寺



三三 平安時代前期 和泉土師



三四 鎌倉時代 和泉久米田寺

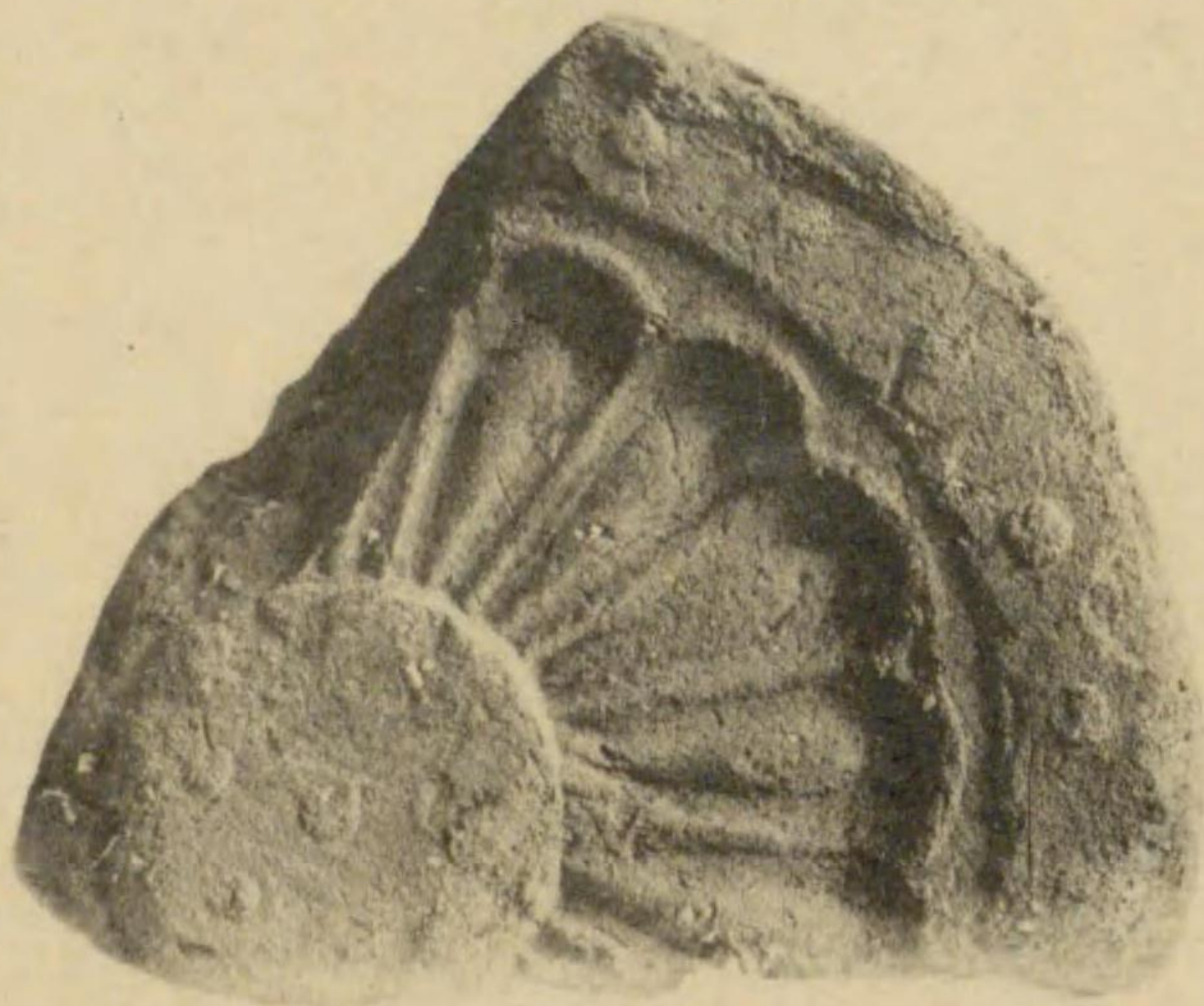


三五 鎌倉時代 和泉久米田寺

第十圖略解



飛鳥寺 四天王 時代 三六



平安時代前期 同上 三七



平安時代前期 國分尼寺 三九



江戸時代 同上 三八

○三六、これは子房は大きく法隆寺出土のものと同様式が似てゐる、しかし法隆寺の反対に蓮華紋は凹んでゐる。子房は普通、蓮華紋は線で出来てゐる、周縁は法隆寺のと同様式を同じくしてゐる、しかし法隆寺のと同様式と甚だ繊弱で大きさも二分の一位である。

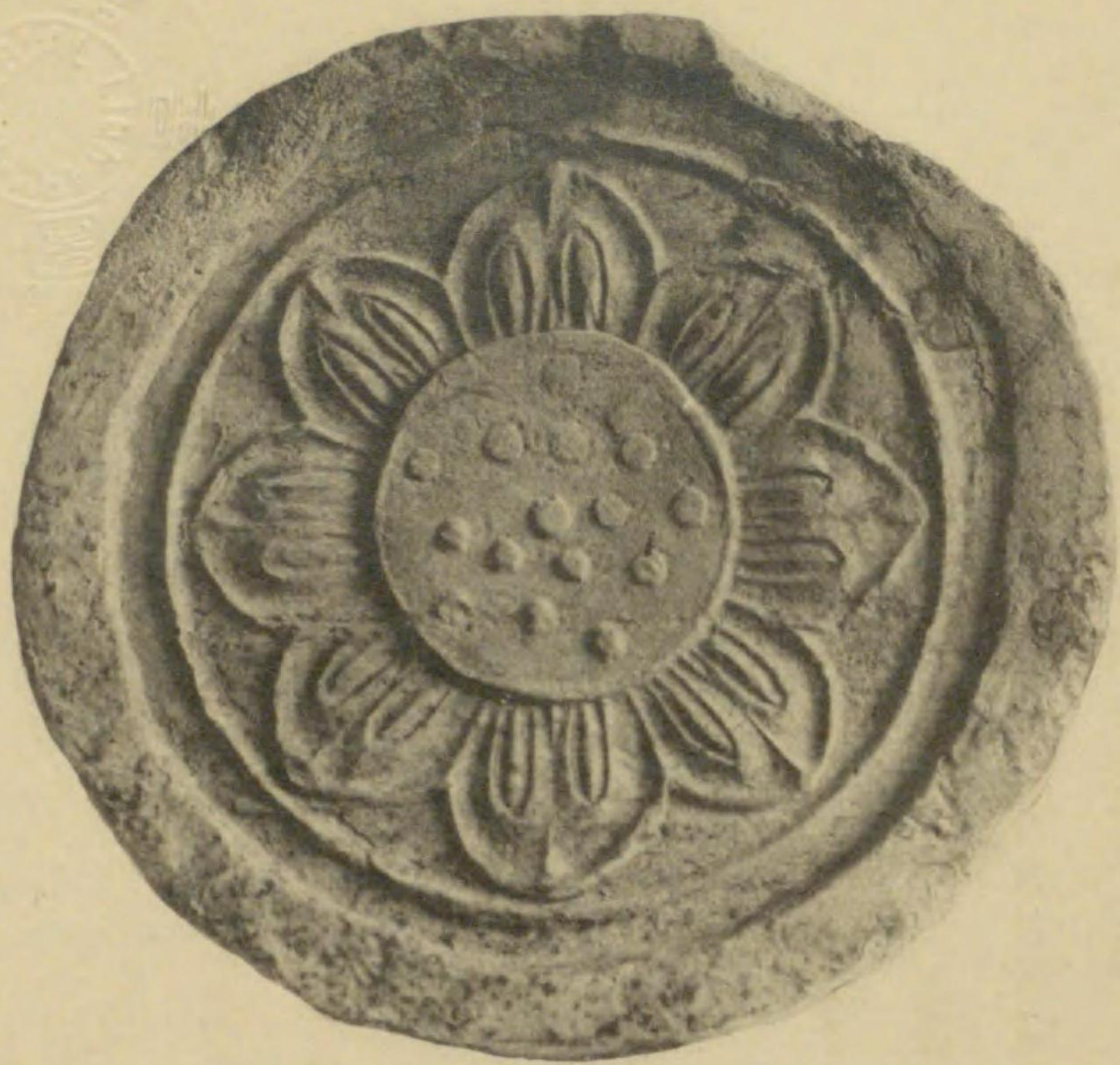
○三七、これは周縁の上に珠紋がある、蓮花紋の様式はかなりだが平凡である。

○三八、寛文十庚戌年製とかいてあるのだが、下の三字缺けてない現今の塔の瓦である。日本紀卷第二十一、崇峻天皇の條に、平亂之後。於攝津國造四天王寺。と云ふのがあつたと思はれる。天王寺は一名荒陵寺、難波大寺、法華園、難波寺、堀江寺、院名を敬田院、荒陵山と號するのである。〔しかれば當寺を御建立あつて始て僧尼の姿を顯はし。四天王寺と。名付給ふ金堂の御本尊は。如意輪の佛像。——何をかつ、む難波寺の鐘のこゑも夜まぎれに。明ぬさきにといざないて高やすの里に歸りけり。〕(謠曲弱法師)

○三九、平安時代前期に普通な唐草である。

第十一圖略解





平安時代
住吉莊嚴淨土寺



同上 一



同上 二

○四〇、の瓦は子房は可なりに大きい、この時代の蓮華紋としてはよくできてゐる。

○四一、は力強い唐草の瓦である、蓮花紋の疏瓦と和調がいゝ。

○四二、の方は四一と同じ瓦である端を見せる爲に入れたのである。

この朝日山莊嚴淨土寺は、——原當山は古寺にして、朱雀帝の御宇天慶三年將門純友誅罰の時當時の尊像に祈り其功を得たり其後國基詔をうけて再興あらんとて地を闢くの時三尺有餘の金札を掘出せり其銘云七寶莊嚴極樂淨土と云ひ因茲都卒内院に表し境内方八町勅願となれり其後十三年を歴て、堀川院御宇永長元年二月勅使延厨宮道式賢郷講師横川慶朝僧都讀師西塔宗心阿闍梨等開元供養あり諸堂巍然として莊嚴炳焉たり星霜累りて今は形ばかりの淨域となれり愚按に國基の再建供養の跡封境の地など考へみるに今の神宮寺と一雙の地と見へたり。

(攝津名所圖會)

○この瓦は津守國基の再建の時のと思ふ、その出土の情態からそう考られるのである。

第十二圖略解





鎌倉時代
住吉莊嚴淨土寺



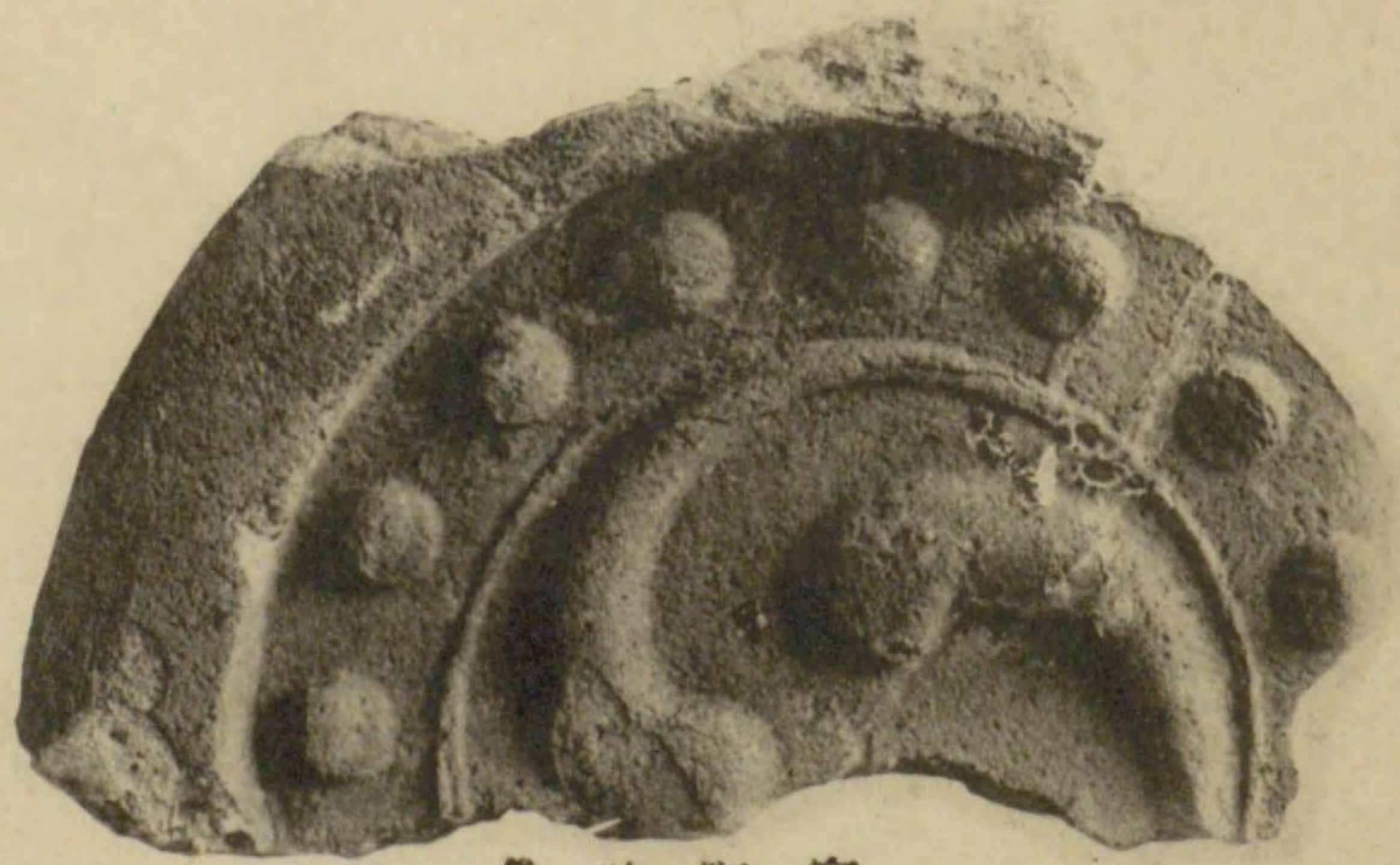
同上



同上



同上



室町時代
同上

○四三、は蓮花紋の様式から見ても四〇の蓮花紋の様式より下る事が分る、しかし蓮辨に筋のあるのが面白い。

○四四、のは鎌倉時代普通の蓮花唐あ草るがよくできてゐる。凡三分の一の大きさである。

○四五、の方は中央は平たい蓮花紋で藤の様な唐草になつてゐる。

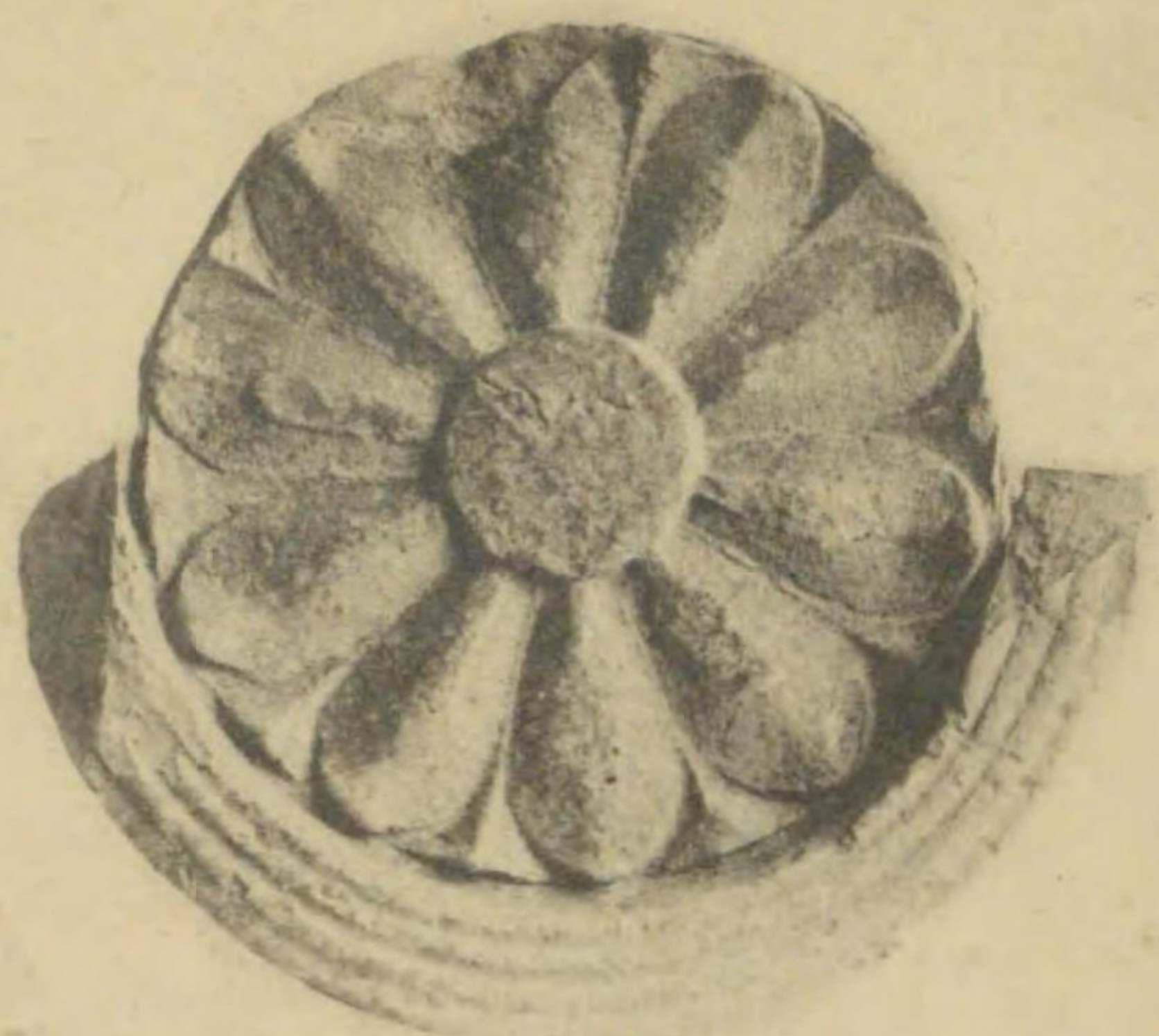
○四六、は珠紋並列。

○四七、は普通の巴紋、この寺は織田氏に焼かれたと云ふのだからこれが最後の瓦である。今江戸時代の小さな堂宇がある。

第十三圖略解

第十三圖





飛鳥時代 飛鳥能廢金寺



奈良時代前期 奈良時代 同上



同上

○四八、は洵に織麗にできてゐる、瓦質もよく釉が自然にでてゐる、紋様はあまり織麗だが屋根に上げてても瓦質によつてよく見へる、周縁上に重圓紋をもつてゐる、様式が飛鳥時代である形は小さい。

○四九、は殆ど蓮花紋と周縁とは平面になつてゐる、珠紋帯をもたない。子房は割合に大きい、この瓦はよく菊花紋の脱化を思はしめる。全体が平面すぎる。

○五〇、は重孤紋で前に第二圖善正寺山出土の所で述べた様に飛鳥時代にもこの様式はあつたのであろうかと思ふ。この私の考へはあまりに突飛すぎる厭があるであらう。この重孤紋は善正寺山のよりは製作は劣つてゐる、高井田出土のものと同様に似てゐる、この瓦は筋彫の重孤紋である。

此寺は行基の開基であると云ふ。南北朝頃の戦亂に焼けたと傳ふ。攝津誌にも廢金寺の事が見えてゐる、當所出土の瓦では飛鳥時代の様式より平安時代前期までのものをみた。重孤紋の瓦に付ては前述の通りであるが、重孤紋を飛鳥時代にするか、疏瓦の輪廓に重圓文のある飛鳥時代の様式のを奈良時代前期に降して時代を合はすればいゝのであるが私は重孤文の方を上げて飛鳥時代に入れたいのである。

159
164

【非賣品】

不許複製

大正八年十月十日印刷
大正八年十月十五日發行

編者

大協正



發行者

藤田金治

印刷者

藤田熊三

大正八年十月五日
大正八年十月十日
大正八年十月十五日

【非賣品】

不許複製

大正八年十月十日印刷
大正八年十月十五日發行

編者

大協正

發行者

藤田金治

印刷者

藤田熊三

大正八年十月五日
大正八年十月十日
大正八年十月十五日

159
164

和 系 宗

